テクノプロムナード（21）

半　丈　記

永井　規男

わが日本の建築はもともと木造であった(といわねばならないのが現状)。木造ということは、言わずものことながら、木で建物を造るということである。一昔前まで、日本の住宅は木と紙で出来ていると言われていた。この場合、紙は建物ではなくて建物に付属する諸々の類いであって、木と紙とは同等ではない。しかし、木と紙と言われると、木に加えて紙も構造物体として建物に使われていると信じてしまう外国人は多い。だから日本の住宅はなんともやわで不安な建物と思っている。拙宅で紙障子を見た外国人が、あの向うは外だといったら、やっぱり本当なのか、でも信じられないという顔をする。その外側にガラス戸があるのだけれど、こちらも意地悪くそれは言わない。実際に紙障子を開けてみて、その向うにガラス戸や雨戸を発見して、ほっとした顔をしたものだ。煉瓦造りの家に住んでいると、紙で家をつくるなんてとんでもない話だろうが、それはわれわれにだって想像を絶する話である。もっとも紙も使い様で、最近では紙を構造材として用いるものが現れてきたから、将来は文字通り木と紙で、と言うようになるかも知れない。異文化のことはどうしても先入観でみてしまうもので、たとえば西欧の家は石造だと思っている人が多いが、石は上貼に使われているだけで、芯まで石の家というのはごくすくない。これなど逆さにみた木と紙の類いの話であろう。

木と紙は同類であるが、日本は等質性が特徴とはいうものの、その建築は木類だけで成り立っているわけではない。そこには土類や竹類も加わっているのだが、とりわけ土類がもつ意味や役割は大きい。だから〈木と紙〉というより〈木と土〉といった方が、日本の建築伝統の本質をより的確に伝えることになるのかもしれない。伝統とはしぶといもので、ひと頃は〈木の建築よ、さいなら〉ばりであったのが、近頃は〈やっぱり、木の建築ぜよ〉になってきていて、そのうち土も復活してくる気配がある。木は精神衛生上からも好ましいといわれているが、それだったら土はもっと好ましかろう。泥あそびや土いじりをちょっとでも体験させれてみればよく分かる。最近あるところで土壁塗の体験学習をやったところ希望者が殺到して困ったという。

これほど〈木と土〉は大きな意味をもっているが、この二つ同類項として括れるものでもなさそうだ。歴史的建築を代表するものは神社建築と仏教建築であるが、神社建築とくに神殿は土を全く使わない。屋根も檜皮かコケラで葺いて土を原料とする瓦は使わない。ところが仏教建築は土で壁をつくり、瓦を用い、ときには仏像まで土でつくる。このように土に対する対応がまったく違うのは何故なのか、ずっと不思議に思ってきたが、いまだに要領をえない。じつはこのような区別は民家にも見られるのであって、普通の農村の民家は土壁を用いるのに、山村それも林業で生活を支えてきたようなところの民家は土壁を用いない。蔵ですら昔は板倉が主であったようなのだ。この場合は農耕の民は土に親しんでい、林業の民は木に親しんでいるから、という説明はできるが、その奥にあるものはとなると、これも要領をえない。ともかく、〈木と土〉は同類項ではなさそうなのであって、極端にいうと日本には木の民と土の民がいたということになる。普通考えられているほど日本人は等質ではないということが、近年の歴史学では叫ばれているようだが、建築の上でもこのような二質性が見えるという次第である。